

静岡文化芸術大学 図書館・情報センターだより

新知故温

Shizuoka University of Art and Culture Library News

2016.12 Vol.29

平成28年12月発行

発行所 静岡文化芸術大学 図書館・情報センター
〒430-8533 浜松市中区中央二丁目1番1号
TEL(053)457-6124 FAX(053)457-6125
<http://www.suac.ac.jp/library/>

Contents

■表紙

Impulse (Trend Book) — ①

■図書館散歩

大学時代の読書 ————— ②

国際文化学科長 教授
西田 かほる

想像と創造 ————— ③

— イマジネーションからクリエイションへ

デザイン学部長 教授
伊豆 裕一

■特集

わたしの1冊 ————— ④

～おすすめの本を紹介します～

■巻末

図書館ニュース ————— ⑧



Impulse (Trend Book) / Carlin International [編集・発行]

[757/C 18]

今回は、デザインの図書をご紹介します。当センターで所蔵する資料の中でも極めて特徴的なカルラン・インターナショナルのトレンドブック“Impulse”です。トレンドブックという名のとおり、アパレル、プロダクト、グラフィック、建築など様々な業界に於ける2年先の世界のデザイントレンドが体系的にまとめられています。

本書を編集・発行するカルラン・インターナショナルは、トレンドを「社会の趨勢」と捉え、デザインのトレンドを調査・分析しています。このうち、2年先の中期トレンドの情報を各カテゴリーにまとめたものがトレンドブックで、今回ご紹介する“Impulse”は、カラーやインテリアなど様々なトレンドを総括したコンセプトブックです。

本書の最大の特徴は、テキスタイルやマテリアルなどの素材が図書に貼付され、見るだけでなく質感や素材感を実際に触って確認できることです。世界中から集められた様々な情報や素材はとても刺激的で、デザインをしたり企画・構想を練ったりするときに必要なアイデアを与えてくれます。

トレンドとして採り上げられたテーマの最後には、関連するアート作品や建築、プロダクトの紹介ページがあり、実社会での活用例を知ることができます。図書のグラフィックも面白く、デザインの専門家でなくても楽しめる内容です。なお、本書の原文はフランス語ですが、日本語訳冊子も付属しています。



国際文化学科長 教授

西田 かほる

Nishida Kaoru

本文中に登場した資料

谷崎潤一郎[著]
『文章読本』
[816/Ta 88]

出光美術館[編]
『近年発見の窯址出土中国陶磁展』
[706.951/I 19]

東京国立博物館[編]
『日本の陶磁:特別展』
[706.951/To 46]

石井進[著]
『もうひとつの鎌倉:歴史の風景』
[291.37/I 75]

網野善彦[著]
『無縁・公界・楽:
日本中世の自由と平和』
[210.4/A 45]

小葉田淳[著]
『日本鉱山史の研究』
[560.921/Ko 11/1-2]

山口啓二[ほか]執筆
『採鉱と冶金』
(講座・日本技術の社会史,第5巻)
[502.1/Ko 98/5]

女性史総合研究会[編]
『日本女性史』(第1巻-第5巻)
[367.21/N 772/1-5]

良知力[著]
『女が銃をとるまで:
若きマルクスとその時代』
[367.234/Ma 59]

安丸良夫[著]
『神々の明治維新:
神仏分離と廃仏毀釈』
[081/I 952/103]

コンラート・ローレンツ[著]
『ソロモンの指環:動物行動学入門』
[481.78/L 88]

リチャード・P.ファインマン[著]
『ご冗談でしょう、ファインマンさん』
[420.28/F 23/1-2]

大学時代の読書

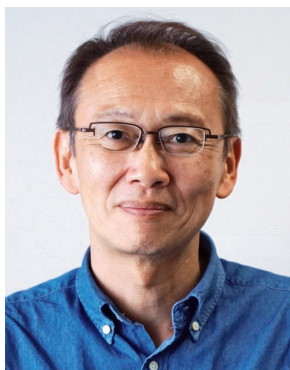
大学院に入った直後、卒業論文の副査だった先生から、「君の文章は、なんとも古臭いジジイのようですね。」といわれた。どうしたら文章が上手に書けるようになるのかを尋ねたところ、まずは文章読本を読むよう指導された。薦められたのは、谷崎潤一郎の『文章読本』だった。すぐに購入して読んでみたものの、文章が下手なことの原因には自身心当たりがあった。それは絶対的な読書量の不足である。そのようなことなので、本について書くのは相応しくないが、学生生活とその中での乏しい読書について書いてみたい。

大学に入ってやってみたかったことのひとつが、発掘である。入学した大学に考古学の専攻がなかったので、中世城郭の発掘をする歴史考古学クラブに入部した。土に向かって体を動かすことが楽しくて、それだけで満足だったが、先輩から薦められるままに遺跡から出土する中国陶磁や焼物の本を読んだりしていた。ちょうど社会史が盛んな頃で、考古学の世界でも一乗谷とか鎌倉の発掘を通じて中世の庶民の生活が明らかになりつつあり、それらを素材とした本がたくさん出版されていた。石井進『もうひとつの鎌倉』は大半が写真の小冊子であるが、当時最新のテーマで構成されており、高校の非常勤講師をしていた頃には小ネタ本としても利用していた。網野善彦の『無縁・公界・楽』をはじめ、中世史の本はいずれも刺激的で、当時の史学科の学生で影響をうけなかった者はいないだろう。

クラブでは中世城郭の自主発掘を行うような状況ではなくなり、大学3年の時から「黒川金山遺跡研究会」の一員として、戦国大名武田氏の隠し金山といわれた黒川金山（現山梨県甲州市）の調査に参加することになった。金山跡は鬱蒼とした山中にあり、そこにテントを張って寝泊まりしつつ、夏のほとんどもを過ごした。これをきっかけに院内銀山（現秋田県湯沢市）の鉱山奉行の日記を読みはじめ、近世初期の鉱山町の遊女を卒業論文のテーマにした。鉱山については小葉田淳『日本鉱山史の研究』や『採鉱と冶金』といった名著があるが、女性に関する論文の方が自分にはぴったりくるものが多かった。何事も女性だけでやるしかないというスタンスだった片田舎の女子高校出身者にとって、都会の大学での女性に対する「優しさ」に違和感があったからかもしれない。社会では男女雇用機会均等法が施行された時期であり、女性史研究も急速な進展を見せていた。『日本女性史』は、今日でも辞書代わりとなる本である。また良知力『女が銃をとるまで』はドイツが舞台であるけれど、女性史の視点を広げてくれた一書であった。

先の黒川金山の調査は、考古だけではなく民俗と文献の総合調査であったから、聞き取りや古文書の調査も行っていた。そこで新たに発見した神社の古文書を、3年ほどかけて整理した。「青年の家」と称する市の施設（空き家）に貸布団を入れ、風呂がないので近くの宿で温泉をいただき、朝食は自炊という合宿であったが、これまたわいわいとした楽しい調査であった。せっかくだからと整理した古文書を読み始め、大学院に入ってから近世の神社の研究をするようになった。そのころ読んだ本で、今でもしばしば読み返すのは、安丸良夫『神々の明治維新』である。神社に関して面白い本は何ですか、と聞かれると、いつもこの本を紹介している。

このような調子で、基本、体力任せの毎日を送り、目先の本や論文を読むに過ぎない、読書とも言えない読書であった。その中で歴史とは関係ない本をあげるとすれば、コンラート・ローレンツの『ソロモンの指環』だろう。ローレンツの本はいずれも読みやすく、動物の行動をつい人間に置き換えているという想像し、楽しんだり、身につまされたりもした。上京後、時々一緒に遊んでいた高校時代の友人が、「絶対面白いから読んでみて」とプレゼントしてくれたのが、R.P.ファインマン『ご冗談でしょう、ファインマンさん』だった。実は物理学者というだけで読んでみる気になれず、本棚に押し込んだままになっていた。彼女に感想も言わず仕舞いであったことがずっと心に引っ掛かっていたので、これを機に読んでみようと思う。と、ここで稿を閉じるはずであった。つい数日前、冒頭の先生の訃報に接した。いまだに文章が下手な私のことを、先生は苦笑しているかもしれない。



デザイン学部長 教授

伊豆 裕一

Izu Yuichi

本文中に登場した資料

司馬遼太郎[著]
『燃えよ剣』
(司馬遼太郎全集:G)
[918.68/Sh 15/6]

司馬遼太郎[著]
『覇王の家』(前編,後編)
[913.6/Sh 15-7/1-2]

塩野七生, 宮下規久朗[著]
『ヴェネツィア物語』
[293.7/Sh 75]

ロバート・キャバ[著]
『ちょっとピンボケ』
[740.253/C 16]

五木寛之[著]
『風に吹かれて』
[914.6/191-1]

五木寛之[著]
『他力』
[914.6/191]

五木寛之[著]
『人間の覚悟』
[914.6/191]

星新一[著]
『ボッコちゃん:どこかの事件』
[918.6/Sh 61/67]

H.B.レント[著]
『カー・スタイリング』
[537.5/L 54]

シンシア・スミス[編]
『世界を変えるデザイン
:ものづくりには夢がある』
[504/Sm 5/1-2]

想像と創造ーイマジネーションからクリエイションへ

先日、京都でデザインの展示会を見た後、帰りの電車まで少し時間があつたため祇園から高台寺に向けてぶらぶらと歩いた。ふと、伊藤甲子太郎、御陵衛士屯所跡と書かれた案内板が目に入った。伊藤らの新選組離脱から暗殺に至るまでは、司馬遼太郎の『燃えよ剣』の中でも多くのページがさかれていたことを思い出した。歴史・時代小説を読むとき、知らず知らずのうちに登場人物の姿や場面が思い浮かぶ。その後、舞台となった場所を訪れ、想像した場面の景色と比較するのは楽しい。そんなわけで、4年前に浜松に住み始めた時もさっそく想像していた景色との比較を目的に三方原を訪れた。徳川家康を主人公とした『覇王の家』には、徳川軍は少ない戦力にも関わらず、本来は味方が多勢の時に威力を発揮する鶴が羽を広げたような形の鶴翼の陣で武田信玄の軍勢を迎え撃ち惨敗したとある。

教員となる前の前職では海外で仕事をする機会も多く、ミラノでは塩野七生の『ヴェネツィア物語』を読み、その週末には早速ベニスを訪れた。また、英国の港町から搭乗したプロペラ機の窓からドーバー海峡を越えパリに向かう景色を眺めながら、ロバート・キャバの『ちょっとピンボケ』に書かれたノルマンディ上陸作戦後の連合軍の侵攻ルートと重ね合わせたことなどが思い出深い。読書には、語彙力や論理的思考力の向上など多くの効果が言われるが、やはり想像力を養うというのが一番ではないだろうか。

高校生の頃、五木寛之の小説には随分と影響された。国語の授業中、先生に「教科書に出てくるような文学も良いけど、最近話題になっている作家も読んでおいたほうが良いぞ。たとえば五木寛之、五木ひろし（歌手）じゃないぞ!」と言われ、横浜の本屋で買ったのが『風に吹かれて』だった。まず、ボブ・ディランの曲と同名のタイトルがカッコ良かった。著者の体験をもとに書かれた短編小説には、当時漠然とあこがれていた大学生活や海外の街の様子などが描かれ、将来を想像するようなワクワクした気持ちで読んだ。最近では、『他力』や『人間の覚悟』など氏の人生観に基づく本を多く書かれているが、同時代を先輩として生き、発信している作家の本を、その時々で読むことができるのはありがたい。

歴史小説や作家の体験に基づいた小説では、取材や自らの記憶により書かれた文書から場面を想像するのにに対し、未来を描いたSF小説のシーンの想像には、作家との共同作業としての「創造」の要素が入ってくるように思う。SF小説も好きな分野で、中学生の頃よく読んだ星新一は、イラストレーターの真鍋博の表紙絵や挿絵とともによく覚えている。『ボッコちゃん』という短編があり「あらゆる美人の要素をとり入れたので、完全な美人が出来上がった。」と書かれたロボットに恋をしてしまった青年の起こす悲劇が描かれている。最近、アイドルグループの人気タレントそっくりのロボットが作られたとテレビで紹介されているのを見た。何十年も前に「想像」された小説の世界が現実のものとして「創造」されたわけである。

「創造」(Creation) には、「想像」(Imagination) が必要だ。デザインにおいては、デザインの対象が使用されるシーンや求められるサービスを「想像」することで、ユーザーのニーズに答えるデザインの「創造」が可能になる。そう考えると読書は、文章を通して作家の描いた世界を「想像」し、自らの人生の「創造」に役立てることとも言えるのではないだろうか。

デザインの世界に私を導いてくれたのも一冊の本である。進路について悩んでいたころ、高校の図書館で偶然目に入ったH.B.レントの『カー・スタイリング (THE LOOK OF CARS: Yesterday/Today/Tomorrow)』を読んで、当時まだ一般にはあまり知られていなかった工業デザイナーの仕事を知った。ドラフター (製図台) に向かってレンダリング (完成状態図) を描くデザイナーの姿にあこがれ、工業デザインを学べる大学に進んだ。その後電機メーカーに入社し、家庭用のラジオやテレビから大型の医療機器まで多くデザイン開発に関わるきっかけとなった。

最後に、最近のデザインの本でお勧めしたいのは、『世界を変えるデザイン (Design for the other 90%)』とその続編となる『世界を変えるデザイン2 (Design with the other 90%)』だ。The other 90%とは、現在多くの日本人が当たり前のこととして享受している、水道や電気などの公共サービスを受けたり、治安の保たれた地域に居住することのできない人々の世界人口に占める割合が90%にも達することを意味している。これらの人々には、普段我々が消費しているデザインの多くは必要とされない。これらの本では、その90%の人々の暮らしの改善を目的としたデザインの取り組み事例が紹介されている。一冊目がfor the other 90%と上から目線なのに対し、続編ではwith the other 90%となっていてところも嬉しい。読書を通して、自分の知らなかった世界の現実を「想像」することで、これからデザイナーが「創造」し解決すべき課題を示してくれている。

『バングラデシュ/
生存と関係のフィールドワーク』

西川麦子〔著〕

平凡社, 2001.11

[302.257/N 83]



バングラデシュと聞くと皆さんどのような印象を持ちますか？貧困国、カレー、洪水の国。そんなイメージを抱く人が多いのではないかと思います。

私は、2014年に約1年間バングラデシュのチッタゴン丘陵地帯で暮らしました。はじめは日本との違いに驚かされたものの、人間関係や生き方などの人間として当たり前の生活がここにもあるという当然の事実気付くことができました。

図書館にはバングラデシュ関係の本はたくさんありますが、その中でも一番初めに会った本を紹介したいと思います。この本は、大学入学以前より国際協力に関心があった私に、1年生の時にゼミの先生がすすめてくれました。

『バングラデシュ/生存と関係のフィールドワーク』の筆者、西川麦子さんは、1988年から1991年までの間の3年間バングラデシュの農村部に暮らし文化人類学者としてフィールドワークを行いました。今でこそ、農村部の広範囲に電気、ガス、水道、さらにはネット環境もありますが、この時代はもちろんすべてがなく、日本との通信手段は郵便だけという中でフィールドワーク。生きる／食いつなぐ／生き残るという3つの章から成り立っているのですが、どの章も淡々と日常生活の様子やそこで起きた事件などが書かれています。

特にバングラデシュ社会を表していると感じたのは、7章で筆者自身が2万タカを盗まれた事件をめぐっての考察です。様々な感情が渦巻く現場の中で事実をそのまま書いているため、まるで読み手側も同じ現場にいるような感覚にさせられます。モノや便利さは今のバングラデシュよりも低く感じますが、そこにある生活の基礎や村の仕組みなどは今と共通した部分が多くあり、最近出た文献と比較して読んでみても面白いです。

今年7月にあったテロなどでマイナスイメージがついてしまうバングラデシュですが、そこに暮らす人の素朴さや日本人と変わらない感情に渦巻いたその世界観を体験することのできる1冊です。バングラデシュに関心のある人やフィールドワークに興味のある人に手に取ってもらいたいです。

【文化政策学部 国際文化学科 4年 田中 志歩】

みなさんの学生生活は薔薇色ですか？ほとんどの人が勉強やサークル活動、アルバイトや趣味など、いろいろなことに積極的に取り組んでいるのだと思います。でも、中にはそういったアクティブなことにはあまり興味を持たない人もいますでしょう。活動的な薔薇色ではなく「省エネ」な灰色を好む、この本の主人公はまさにそのような少年です。

高校に入学したばかりの折木奉太郎は、姉の言いつけで廃部寸前の古典部に入部します。彼はその中で、いつのまにか密室になっていた教室、毎週必ず借りられていく本、そして文集『氷菓』に秘められた33年前の真実など、日常に潜む不思議な謎を次々と解き明かしていくことになります。

この本の面白さは、謎解きはもちろんのこと、主人公である奉太郎の心境が変化していくところにあると思います。奉太郎は「やらなくてもいいことなら、やらない。やらなければいけないことは手短かに」をモットーにしています。そんな彼が「面倒で、浪費としか思えない」謎解きをすることになったのには、同じ新入部員の一人である千反田えるの存在が大きく影響しています。普段は楚々として清楚な彼女ですが、何か不思議なことがあると好奇心を抑えられなくなってしまいます。真実を知りたいと頼まれた奉太郎は初め、彼女の好奇心に仕方なく付き合っていました。しかし古典部をめぐる出来事の中で、彼は徐々に自分から真相を追い求めるようになっていくのです。

彼は何を感じ、何を思ったのでしょうか。本当に薔薇色であることは幸せで、灰色であることは悲しいことなのでしょう。薔薇色と灰色のはざまで揺れていた私に、この本はある種の答えをくれたような気がします。青春、謎解き、生き方、真実…たった200ページほどの文章に凝縮されたエッセンスを、ぜひみなさん自身で感じ取ってみてください。

【文化政策学部 文化政策学科 3年 山田 彩樹】

『氷菓』

米澤穂信〔著〕

KADOKAWA, 2001.11

[913.6/Y 84]



特集 わたしの1冊 ～おすすめの本を紹介します～

私の出身は文学部の美学芸術学研究室です。18世紀ドイツに起源をもつ美学という学問名称は、感性・美・とりわけ芸術に関する哲学的考察を指しますので、つい抽象的なばかりの内容を想像されがちですが、私は純粋な芸術から、用途という要素の強い建築・デザインに研究分野をはみ出してきたという経緯からも、「人の感性的認識は歴史の力を受ける」と考えるので、研究でも授業でも個別具体的な歴史の動きと関連づけた話をします。カッコいい、かわいい、萌え、美しいなどが、時代も地域もジェンダーも階層も越えて普遍的だとは思えません。

ですから本学で私が普遍的な哲学よりも、個別具体的なデザイン史や建築・空間史の授業を担当しているのは、わりに素直な出来事です（与えられた務めに自分の特性が一致することは稀です）。しかし素直な現象にこそ観念的な問いが容易に浮かびます——自分は学生の将来に向けてどの立場から、どの枠組みで歴史を語るべきか。これを科目ごとに変えて試しているのが、教師としての私の現状です。

数ある枠組みの中で可能性を感じているのは、グローバル・ヒストリーという歴史学の潮流です。本来は経済・貿易史に始まった考え方で、本学だと四方田先生がお詳しいでしょう。評価は別にすればジャレド・ダイヤモンド『銃・病原菌・鉄』（原著NY: W.W. Norton, 1997）が有名です。私の研究対象（戦間期日本の建築論）に引き付けると、日本・東洋・西洋・近代……といった枠組みを前提とせず、地球上の人・財・知識のストックやフローとして建築やデザインを捉えます。

私が新しい枠組みに飛びつきたい背景は、文化財保護の需要から国内の研究組織で幅を利かせる「日本建築史」に対し、自国中心主義を脱却したいながらも、「西洋／近代建築史」を前提にする世界的な議論に対し、グローバリズムによる一元化を歴史学的認識にまで及ぼされたくないという、私の両義的な態度です。そこで私の視野狭窄をほぐし、人類にとっての建築の原点＝居住に立ち返らせてくれる、例えばバーナード・ルドフスキー『建築家なしの建築』（NY: MoMA, 1964／鹿島出版会1975）やその類書が、今読み直したい「わたしの一冊」です。

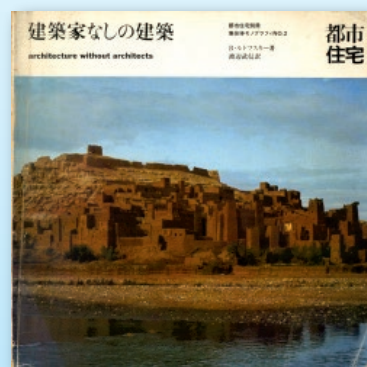
【デザイン学部 デザイン学科 講師 天内 大樹】

『建築家なしの建築』

バーナード・ルドフスキー〔著〕

鹿島出版会, 1975

[520.2/R 82]

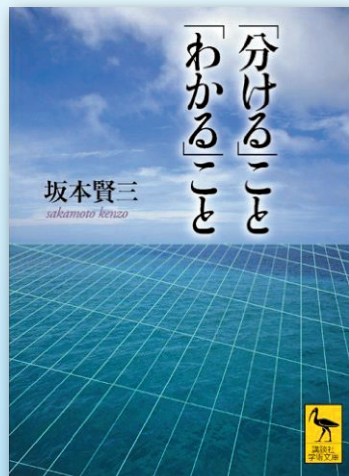


『「分ける」こと 「わかる」こと』

坂本賢三〔著〕

講談社, 2006.6

[081/Ko 191/1767]



学生の時に授業内で先生に勧められた本です。ものの見方や考え方の基本が学べる一冊です。1982年に講談社現代新書として刊行された本が、現在は文庫本になって刊行されています。

この本では、長い歴史の中で人が「分ける」ことによって「わかって」としてきたことが示されたのち、徹底して「わかる」ということがどういうことなのかという考察がなされています。第1章では、元来一つであった二つのものが一つになるうとする「恋」について和歌を引き合いに出して考察されていたり、対（つい）の概念について、易の考え方を紹介しながらの説明がなされたりしています。さらに以降の章では、語源にさかのぼる考察に始まり、文学、中国思想、西洋哲学、仏教における分類についての考え方の紹介、さらには『色道大鏡』なる遊郭百科全書において「野暮から粋への道」への分類がなされていることを示すにまで至り、著者の考察の対象範囲はとどまることを知らず、感心させられます。

『大乘起信論』で示されている「体・用・相」の3つの面からの捉え方を原点にして、「人を見るときにも、道具や技術を見るときにも、社会や芸術や学問をあつかうときにも、いつでも体と相と用の三つの面から見ていたのではなからうか」という仮説が提示され、さらには「マテリアルとデザインとファッションなども、やはり体・相・用の区分ではなかつたろうか」というような指摘もなされています。

最後に、「わかる」とは、「自己とは異なる分類体系がわかるということなのである。」と結論づけて、人と人、国と国などにおける「わかりあう」ということはどういう意味なのか教えてくれています。

学生時代に読んで以降、この本は、常にものごとについて考えていく際の指針となっていたような気がしています。改めて読み返してみても、建築の構造について探求している現在でも、この本が投げかけていることに対して、今もって向き合っていくべきなのだと再認識しました。

この「わたしの一冊」の企画の名称は、おそらくは、「私」と「渡し」をかけたものだと思いますが、今回寄稿することによって、学生の皆さんに渡すということ以上に、学生時代の私から今現在の私自身への思考の橋渡しが行うことができました。ご依頼いただいたことに感謝いたします。

【デザイン学部 デザイン学科 准教授 岩崎 敏之】

『アサーション入門：自分も相手も大切に自己表現法』

平木典子〔著〕

講談社、2012.2

[081/Ko 19/2143]



本書は、「アサーション」の概念と使い方について、親切に、分かりやすく紹介している本です。「自分も相手（他者）も大切に自己表現」を意味するアサーションは、私たちの会話を心理学の知見をもとに読み解き、日常のやり取りに変化と充実感をもたらすコミュニケーションの方法と関わり方です。これは、職場でも、家庭でも、あるいは地域においても、どこでも使えるスキルだといえます。

しかしながら、相手だけでなく自分も大切にすることは、当たり前のことのように、実際にはなかなか難しいものです。私たちは、そのときの自分や相手の状況によって、言いたいことが言えなかったり、言い方が分からなかったり、逆に言いたいことが言えても相手に不愉快な思いをさせたり、相手を傷つけてしまったりすることもあります。また、そのようなエピソードの記憶が失敗を恐れる気持ちを生み、自己表現をギクシャクさせたりします。

筆者は本書で、このような日常のコミュニケーションをふり返り、アサーションの視点から自分を見つめ直し、自分らしい考え方、話し方、生き方を探してもらうことを目指しています。みなさんもぜひ、本書を読んで、これを実践してください。

ところで、本書では、アサーションができる人の例として、「ドラえもん」のしずかちゃんが紹介されています。たとえば、「遊ぼう」と言われたけれど事情があって遊べないとき、のび太は自分を大事にせず、遊びに行ってしまうそうですよね。ジャイアンだったら、誘った相手を怒りそうです。こんなときしずかちゃんは、「ピアノのおけいこがあるから遊べないけど、また誘ってね」のように言うのだそうです。そしてこのような表現は、①自分の気持ちを確かめ、②状況を共有し、③具体的な提案をする、というアサーションの3つのポイントを押さえているのです。なるほど、と思いませんか？「ドラえもん」もアサーションの参考にしてください。

【文化政策学部 文化政策学科 准教授 小杉 大輔】

幼いころから活字が好きだったので「この1冊」と言われても、とても難しい。今回は、ふーっと深呼吸しながら人生を見つめ直し、僕自身が自治体文化政策研究を志す契機となった書籍を紹介したいと思います。全国紙勤務から大学教授に転じるようになった訳で、改めて読み返すと当時の初心に戻ることができます。

著者の中川幾郎先生（帝塚山大学名誉教授）は同志社大学を卒業後、豊中市に奉職されました。公務員として勤務しながら、大阪大学大学院国際公共政策研究科で学ばれたのです。博士論文をもとに書かれたのが本書です。

文化政策研究の先駆者の研究を踏まえつつ、より精緻化した自治体文化政策基本モデルを打ち立てられました。3つの主体（市民文化、都市文化、行政文化）×3つの活動側面（表現、交流、蓄積）×3つの資源（ヒューマンウェア、ソフトウェア、ハードウェア）という3次元モデルで、想定できる29区分のマトリクスは「政策転換のためのテーマ発見リストとしても使用できる」とされました。なかでも「ハード以前にソフトがあり、ソフト以前にヒューマンウェアの不可欠性がある」という先生の指摘はとても新鮮でした。目からうろこが落ちる思いをしたものです。

本書出版当時、中川先生は日本アートマネジメント学会関西支部会長の、僕は同部会事務局長を務めていました。先生に私淑しながら、本書の理論を実際の文化施設に当てはめて分析したいと願うようになり、大学院で学び直そうと決心したのでした。京都市立の京都芸術センター、大阪市にある劇場寺院・應典院、神戸市の古い移民施設を活用した民間アートセンター・CAP HOUSEの詳しい調査を行い、分析成果をまとめたのが博士論文『芸術創造拠点と自治体文化政策 京阪神3都の事例分析』（2009）です。加筆修正して2年後に『官民協働の文化政策 人材・資金・場』（水曜社、2011）を出版できました。独自の分析枠組みを提示できたのも、中川モデルを学んだおかげだと感じています。

現在、中川先生は、本学の大学院文化政策研究科の非常勤講師をお引き受けくださっています。感謝の気持ちを込めて、先生とのご縁を振り返っています。

【文化政策学部 芸術文化学科 教授 松本 茂章】

『分権時代の自治体文化政策：ハコモノづくりから総合政策評価に向けて』

中川幾郎〔著〕

勁草書房、2001.4

[709.1/N 32]



特集 わたしの1冊 ～おすすめの本を紹介します～

世界は目に見えないもので溢れています。私は理系科目が大の苦手、小学生の頃は数字を見るだけで頭が痛いと言ってよく親に呆れられたものです。そんな私ですが、小学校5年の時に元中学校数学教師だった担任がアインシュタインの本（新書か何か）を貸してくれたことをきっかけに重力という目に見えない存在を知り（以来、幽霊の存在も信じている）、同時に研究をする人には面白い人があるものだな、と人物像に興味を持ち続けてきました。「ご存命の間に一度はお目にかかりたかった人物ベスト3」に入るのがファインマンです。

今回ご紹介する『困ります、ファインマンさん』は、ファインマン著となっていますが彼自身筆を執っておらず、同僚だったロバート・レイトン教授の息子（ファインマンとも親しかった）による聞き書きの逸話集です。ファインマンシリーズの第2作にあたり、ファインマンがこよなく日本を愛していたこと、そして翻訳されたときにそのユーモアが一番よく理解されたのが日本語であったことから米国で出版されるよりも先に日本で出版されています。

ではファインマンとはいったい何者なのか。1918年米国ニューヨーク州に生まれ、量子電磁力学の分野において貢献し、ノーベル物理学賞受賞（1965年）、スペースシャトル・チャレンジャー号爆発事故調査委員としても活躍しました。特にこの本の後半では、事故調査委員会では真相を隠蔽しようとするNASAとの奮闘ぶりについて詳細に、そして人物とのやりとりのあれこれ苦勞をクストとさせるように記しています。世界最高の頭脳の持ち主とされた彼は実にユーモアで、自分の人生を面白可笑しく何度でも人に語って聞かせるのが大好きな人だったといえます。

晩年のファインマンは全身を癌に侵されながらも自らの死を見極めんとしていました。「そんなに心配するなよ。それよりみんな大いに人生を楽しんでくれよ」10年にも及ぶ闘病生活の末、親友たちに告げた最後の言葉だったそうです。本の冒頭では夫人アーリーンとの出会いから早すぎた死別までが語られています。愛する人で経験した死と自身を蝕む死。目には見えない死という現象について、彼は何かを掴めたのでしょうか。

ファインマンシリーズは数冊出版されていますが、そのほか彼について書かれた本はいくつかあります。とにかく理系科目は疎くて…という方にも、ぜひ愉快な彼の人生について興味を持ってもらえると幸いです。

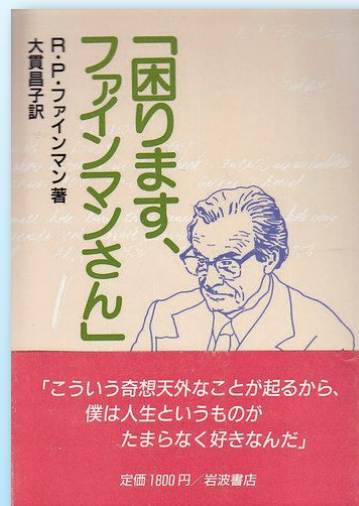
【大学院 文化政策研究科 2年 木村 彩乃】

『困ります、ファインマンさん』

リチャード・P. ファインマン [著]

岩波書店, 1988

[420.28/F 23]



『魔法の世紀』

落合陽一 [著]

Planets : 第二次惑星開発委員会, 2015.11

[007.3/O 15]



私が今回紹介する本は、「魔法の世紀」です。まずは、この本の著者である落合陽一さんを知っていただきたいため経歴を述べていきます。

彼は開成高校を卒業し、筑波大学の情報学群情報メディア学類を卒業、東京大学大学院学際情報学府博士課程を早期修了しました。そして現在は、筑波大学図書館情報メディア系助教として活躍しています。最近、地上波のテレビなどメディアにも多数露出していて認知度も高くなっています。

私が著者を知ったのは、大学時代に教授の繋がりで開催された著者の講演会でした。当時はテレビにもあまり出ておらず、世間への認知度は低かったことを考えると貴重な体験であったとありがたく感じます。講演会で話した内容は、時代の流れや哲学、デザインなど様々な話がクロスし繋がりが合い著者の考える「デジタル・ネイチャー」という考えに至っていました。著者は物事の捉え方が幅広く、様々な知識から見解を行い、現在の問題点、メリット、デメリットを把握しこの先にどのような変化がもたらされるのか、今を生きる人々がどのような生活になっていくのかという長い時間の中で考察を行っていました。

この本の中では、上記で述べた著者の考えがまとめられています。読者を意識し砕けた言葉で記述されていますが、私は一度読むだけでは理解できず調べながら読み進めました。それだけ、著者が考えていることが深くそして広いということであると私は感じました。

凄い経歴や研究とか理系とか言葉が難しいとか自分と違いすぎるという壁を感じずに、まずは手にとって読んでみるのが大事だと思います。そして、その最初の一步としてこの本を推薦したいと思います。そして、この本の紹介を機に、落合陽一さんをチェックしてみると面白いと思います。

【大学院 デザイン研究科 2年 伊藤 智也】

ユニバーサルデザイン絵本コンクール2016を開催しました

静岡文化芸術大学では、身体的・知的特性、年齢、文化などを越えて、皆が一緒に楽しむことのできるユニバーサルデザインの考え方を採り入れた絵本を募集し、「ユニバーサルデザイン絵本コンクール2016」を開催しました。受賞作品は以下のとおりです。多数のご応募ありがとうございました。

■大賞

「はっぱ もり やま」

(静岡文化芸術大学大学院デザイン研究科1年 足立寛奈)

■ユニバーサルデザイン研究賞

「チェントル姫と女王様」

(横浜市立南山田小学校4年 四方あかり)

《子ども部門》

■優秀賞

「がっきのUDえほん」(浜松市立北浜小学校4年 山中大暉)

「おはなしをつくるえほん」(浜松市立二俣小学校2年 鈴木泉)

■佳作

「海ガメの大ぼうけん」(浜松市立曳馬小学校4年 安藤佑真)

「かちょうえんへいく」(浜松市立与進小学校1年 葛西逸斗)

「のぞき絵本」(磐田市立福田小学校4年 藤木桜和)

《高校生部門》

■優秀賞 (該当作なし)

■佳作

「なかみる」(愛知県立豊丘高校3年 石川綾音)

《一般部門》

■優秀賞 (該当作なし)

■佳作

「くいしんぼう ちゃちゃ と まっくらせかい」

(女子美術大学3年 グループちゃちゃ)

「メリー クリスマス」(中村尚子)

《特別賞》

「楽しかった夏休み」(宇城市立中央図書館)

「ななつのとびらのひみつ」(森下まゆり)

※受賞者の敬称は省略させていただきました。

表彰式



「はっぱ もり やま」

小さな子どもでもわかる絵本、ということをテーマとして、かんたんな言葉のくりかえし言葉のシンプルな絵本の制作を行いました。

言葉のリズムを楽しめるものになればと思い、制作しました。

【静岡文化芸術大学大学院
デザイン研究科1年 足立寛奈】



チェントル姫と女王様



がっきのUDえほん



おはなしをつくるえほん



海ガメの大ぼうけん



かちょうえんへいく



のぞき絵本



なかみる



くいしんぼう ちゃちゃ と まっくらせかい



メリー クリスマス



楽しかった夏休み



ななつのとびらのひみつ



表彰式後の座談会